

リツキシマブ併用化学療法時のB細胞性悪性リンパ腫患者に対する低用量ST合剤によるPCP発症予防の検討

ニューモシスチス肺炎（PCP）は、酵母様真菌であるニューモシスチス・イロベチイ（*Pneumocystis jirovecii*）によって引き起こされる肺炎です。正常な免疫能力を持つ場合発症することは希ですが、化学療法やステロイド剤長期内服、後天性免疫不全症候群（AIDS）などによる免疫低下時に発症する、日和見感染症の一つです。近年、B細胞性悪性リンパ腫の患者さんにリツキシマブを併用した化学療法を施行した場合にもPCPのリスクがあることが分かってきました。このためPCP予防のためST合剤（バクトラミン®）を化学療法を実施している際に服用して頂くことが一般的です。しかしこのバクトラミン®の副作用として薬疹、肝機能障害、電解質異常が知られています。B細胞性悪性リンパ腫患者さんにおいてリツキシマブを併用した化学療法を施行した際のPCP予防法は現時点で確立されていません。そこで当院では副作用を減らすためにバクトラミン®の投与量を適宜減量（低用量ST）しています。これら減量した投与方法での有効性や副作用の評価を検討する研究を計画しています。

2010年4月～2015年3月までに当院で診断されたB細胞性悪性リンパ腫患者さんにおいてリツキシマブを併用した化学療法を実施した患者さんのうち、PCP予防をした患者さんの診療情報を収集して解析を行います。この研究では、集計・解析に際して匿名化して情報を取り扱い、対象者の個人情報厳重に保護しています。上記に該当する方で、この研究についてのご質問や研究協力の拒否を希望される方がございましたら、お手数ですが公立陶生病院血液・腫瘍内科医師・梶口智弘（電話0561-82-5101）までご連絡いただければ幸いです。

研究協力者：公立陶生病院 血液・腫瘍内科部長 梶口 智弘

研究協力者：公立陶生病院 血液・腫瘍内科医長 宮尾 康太郎

研究協力者：公立陶生病院 元血液・腫瘍内科医長 酒村 玲央奈